

中印国境の緊張が高まる

漢和防務評論 20130822（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

先日中国が尖閣諸島方面に無人機を飛行させましたが、中印国境の紛争地域では、以前から中国がインドの支配地域上空に向けて無人機を飛行させているようです。

今回ご紹介する漢和防務評論の記事によると、今年4月から中国軍がインド軍支配地域に10KMほど侵入しヘリなどを飛行させているようです。インドの反応を探り、既成事実を作ろうとするのは尖閣諸島方面もねらいは同じではないでしょうか。

双方とも今は軍事衝突へのエスカレートは求めていませんが、作戦準備は着実に進めているようです。

漢和防務評論誌は、航空部隊の勢力は、圧倒的にインド側が有利であると述べています。

KDR 編集部特集記事：

インドは、中国軍が2013年4月以来、双方の支配地域の境界線からインド側に10 KM 侵入し、野営用テントを設営し何度もヘリを飛行させたと言っている。インドも対抗するため同様に野営用テントを設営し対峙している。さらにインドは対抗するために1個歩兵団を前線に増派した。インドの新聞は、4月から5月にかけて中国軍の越境事件をヘッドラインニュースとして報道した。双方が外交レベルで交渉を行った際、中国側はインド側へ軍隊を侵入させたことはないと言った。注意すべきことは、今回の争議が西段地区で起きたことだ。この40年間、中印双方は、国境の安定を保持するため、実際に支配する区域の境界線を堅持維持することを基本原則としてきた。

インド外交部の官員は、本誌の質問に対し：インドは、過去2年間、国籍不明の飛行物体が中印境界線を越えてインド側に飛行し遊弋するのを何度も見た、と言った。

現在、中印双方は事態の拡大を避けようとしており、国境での野営用テント設営による対峙が軍事衝突にエスカレートする可能性は少ない。しかし双方の作戦準備に関して言えば、着実に進められている。もし本当に衝突が発生したな

らば、態勢全体が中国に不利である。

第一、外交上、米露、東南アジア、及び日本は中国を支持しない。パキスタンを除き、如何なる国家も明確に中国支持を表明する可能性は少ない。同時に中国は、南シナ海周辺国家及び日本と領有権争いをしている。中国の国土を一步出るだけで、パキスタンを除き、世界の如何なる国家も中国が国際的に孤立していることを感じる事が出来る。

軍事的に見ると、チベット地区における中国軍の部隊配備の最大の弱点は：飛行場が集中し数が少なく、補給が青藏鉄道だけに依存していることだ。一方のインドは、航空戦力の技術レベルが高く、特にインドの戦術攻撃機は種類が多く、航続距離が長く、また飛行場の数が多い。戦時、中国軍側が未整備の軍民共用ゴンカル（貢嘎）飛行場とシガツエ（日格則）飛行場のみに依存すればチベット方面の航空作戦は受け身の態勢に陥るであろう。この 2 つの飛行場はこの地区で最も大きな軍民共用飛行場であり、その他の 4 個の小さな飛行場は第三世代戦闘機が使用できない。

また青藏鉄道は、かなり脆弱である。KDR の計算によると、チベット国内には 260 個の大型橋梁及び 2 つの大きなトンネルがある。いくつかの橋梁は長さが 1 KM 以上ある。インド空軍パイロットは、精密攻撃に相当熟練している。インド空軍の MIRAGE-2000H、SU-30MKI 戦闘機が、精密誘導ミサイル及び爆弾を搭載し、橋梁及び 3 大公路を徹底的に破壊したならば、中国軍の補給は重大な問題に直面する。

2013 年以降、中国空軍及び陸軍がチベットの防衛を強化したことは明確である。ラサのゴンカル飛行場には SU-27 戦闘機が何度も現れ、2013 年 2 月 9 日撮影の衛星写真を見ると、ゴンカル飛行場に 5 機の SU-27/J-11 戦闘機が写っていた。これは戦闘機の機動展開が常態化したことを示すものである。しかし整備補給の問題があるため、機動展開する第 3 世代戦闘機の数には制限され、常駐はできないようだ。これらのことから中印間の航空作戦においては中国が弱勢である。またナクチュ（那曲）飛行場は現在拡張工事中であり、軍が使用することは明らかである。

西部地区の飛行場は、アリ（阿里）飛行場しかないが、小型飛行場であり第 3 世代戦闘機の長期運用は不可能である。

第 2 線の飛行場であるホータン（和田）及びゴルムド（格爾木）飛行場は、軍民共用であり整備拡張されている。一旦開戦となると、インドの戦術空軍は必ずこの 2 大飛行場を攻撃する。全体を見てもチベット及び新疆地区で対インド作戦に使える大型飛行場は 5 個しかない。

中国が軍事的に有利な点は、当然第二砲兵の戦役戦術ミサイルの存在である。特に DF-15 型短距離ミサイルは、最近チベット地区に頻繁に出現した。ラサ地区に配備されると、インドのアッサム地方（ASSAM）の主な飛行場を攻撃することが出来る。DF-15 を西部のアリ地区に配備すると、直接ニューデリーを攻撃することが出来る。アリ地区とニューデリー間の直線距離は 501 KM である。

チベットのラサに DF-15B を展開させることは、インド東部の 2 つの重要飛行場である TEZPUR 及び CHABUA（SU-30MKI 戦闘機が展開）がミサイル攻撃されることを意味する。ラサから CHABUA までの直線距離は 461 KM で、TEZPUR までの直線距離はわずか 372 KM である。

インドの航空戦力配備を見ると、東部の大型飛行場は TEZPUR 及び CHABUA 空軍基地であり、アッサム州に位置し、相互の距離は 120 KM である。CHABUA 基地とインド・チベット国境間の距離は 50 KM である。TEZPUR 飛行場とインド・チベット国境までの距離はわずか 22 KM であり、空軍の第 30 中隊が駐屯している。インド空軍は、2013 年に初めて射程 450 KM の空中発射型 BRAHMOS 超音速多用途ミサイルを試射した。インド空軍の東部の 2 つの大型飛行場が中印国境に接近している理由は、中国との国境の地形にある。国境線の全てが高山で、衝立のような障壁を形成し軍事力配備に不利であるためだ。

インドの SU-30MKI の作戦半径は、約 1500 KM であり、チベット地区、甘肅省、四川省、雲南省、新疆地区の大部分を覆う。最も重要なことは、中印国境全体、すなわち東段、中段、西段においてインド空軍は大量の現代化した大型軍用飛行場を建設していることである。攻撃機は JAGUAR、MIG-27 の両機種を有し、航続距離及び搭載弾量は中国の Q-5 攻撃機よりも優れている。ここでは MIRAGE-2000H 型を計算に入れていない。

西部地区において、インド空軍は PATNA、BIHTA、BAREILLY 空軍基地を建設した。中部には BAGHDORA（AVANTIPUR）、HASHIMARA 空軍基地があり、東部には TEZPUR、LENGPUI、BARAPANI、CHABUA 空軍基地がある。

特に西部地区の AMBARA 空軍基地は、第 5 中隊の JAGUAR 攻撃機が配備されており、チベット国境までの距離は 220 KM、アリ地区までの距離は 385 KM である。戦時において、アリ地区の攻撃はこの基地の JAGUAR が担当するはずである。

MIRAGE-2000H 戦闘爆撃機が駐屯する GWALIOR 基地と中印国境の距離は 494 KM である。

中部の軍用飛行場の中で、MIG-21 改良型戦闘機が配備されている BAGHDORA 基地から中印国境までの距離は 143 KM である。同機は KAPYO レーダーに換装され、RVV-AE 型先進式空対空ミサイルを使用することが出来る（第 8 中隊）。MIG-27 が配備された HASHIMARA 軍用飛行場はブータン国との国境に近く、中印国境までの距離がわずか 82 KM しかない。同基地の MIG-27 は、戦時、チベットのシガツエ飛行場を攻撃するであろう。中国はシガツエ飛行場に HQ-9 型地対空ミサイルを配備している。同飛行場は、戦時、空中発射型、戦術超音速ミサイル BRAHMOS の攻撃を受けることは明らかであろう。

インド空軍は、また戦役戦術ミサイルを配備している。主として射程 2000 KM の AGNI-2 型で、同ミサイルは、中国の DF-11A 及び DF-15B 型弾道ミサイルの射程外から中国に向けて発射することができる。

爆撃能力について、中国の H-6H 型爆撃機（TU-16）の長い航続距離を考慮すると、甘粛省の武功に航空兵第 36 師団が駐屯している意味に注目する必要がある。H-6H は射程 200 KM 以上の YJ-63 型空対地ミサイルを使用し、中国側からインド前線の第一線飛行場を空襲することが出来る。その場合、必ず戦闘機による強力な護衛が必要になる。そうしなければ SU-30MKI の攻撃を受ける。

全体的に見ると、航空優勢はインド側が掌握するであろう。

以上